

煎茶用新品種 ‘ふうしゅん’の育成

誌名	野菜・茶業試験場研究報告. B, 茶業
ISSN	09166858
著者名	山口, 聡 武弓, 利雄 池田, 奈実子 武田, 善行 渡邊, 明 築瀬, 好充 安間, 舜
発行元	農林水産省野菜・茶業試験場
巻/号	5号
巻号補足	
掲載ページ	p. 1-13
発行年月	1992年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



煎茶用新品種‘ふうしゅん’の育成

山口 聰・武弓利雄*・池田奈実子・武田善行*

渡邊 明**・築瀬好充***・安間 舜**

(平成3年12月9日受理)

A New Cultivar, 'Fushun', for Green Tea

Satoshi YAMAGUCHI, Toshio TAKYU, Namiko IKEDA, Yoshiyuki TAKEDA,
Akira WATANABE, Yoshimitsu YANASE and Shun AMMA

Synopsis

A new cultivar for green tea, 'Fushun', has been registered under the name of 'Cha-norin-yonjuichi-gou' (Norin No. 41 Tea) by MAFF. 'Fushun', with hardy growth, high yield, and distinctive aroma, is suitable for the cool zone of semi-mountainous region of mainland Japan.

Key words: Fushun, new green-tea cultivar, vigorous tea cultivar, Cha-norin-yonjuichi-gou, Norin No. 41 tea, aromatic green tea.

I 結 言

茶は、土地利用型農業を代表する極めて収益性の高い優れた作物である。特に、一番茶収穫期の単位時間当たりの収益性は著しく高く(約1500円/時間、1990年農蚕園芸局統計)、しかも収穫作業そのものが簡便な摘採機で行え、他作物に比べて少ない設備投資、投下資本でも経営が可能な利点がある。しかし、実際の栽培においては、干害、凍霜害などの気象変動の影響を受けやすく、収益が不安定な一面もあり、品質の優れていることの他に、安定した収量性、耐病性、耐虫性、強健性が要求される。また、現在の国内茶園のほとんどが、‘やぶきた’という特定品種一辺倒であることから、収穫、加工時期の集中による労働過重、労働力の確保の困難さ等の諸問題が引き

起こされている。そのため、茶品種の作付けに多様性をもたせることが重要となっている。野菜・茶業試験場茶栽培部では1991年5月に、‘やぶきた’に代替可能なほど、強健かつ香気の特徴のある新品種‘ふうしゅん’を農林登録した。ここに、その育成経過と特性についてとりまとめた。

なお、本品種の育成に当たっては、茨城県山間地帯特産指導所(茨城山間)、京都府立茶業研究所(京都茶研)、三重県農業技術センター茶業センター(三重茶セ)、高知県農業技術センター茶業試験場(高知茶セ)、熊本県農業研究センター茶業研究所(熊本茶研)の系統適応性検定指定試験地、静岡県茶業試験場、鹿児島県茶業試験場の特性検定指定試験地、及び埼玉県茶業試験場、宮崎県総合農業試験場茶業支場の茶育種指定試験地、及び野菜・茶業試験場久留米支場(枕崎)、さらには神奈川県、滋賀県、香川県、福岡県、長崎県、大分県等の茶関係試験場の関係諸氏のご協力

〒428 静岡県榛原郡金谷町金谷 2769

茶栽培部

* 現 久留米支場

** 元 茶栽培部

*** 現 野菜育種部

を受け、幾多の有益なご助言を頂いたことに対して、ここに深甚の謝意を表する。

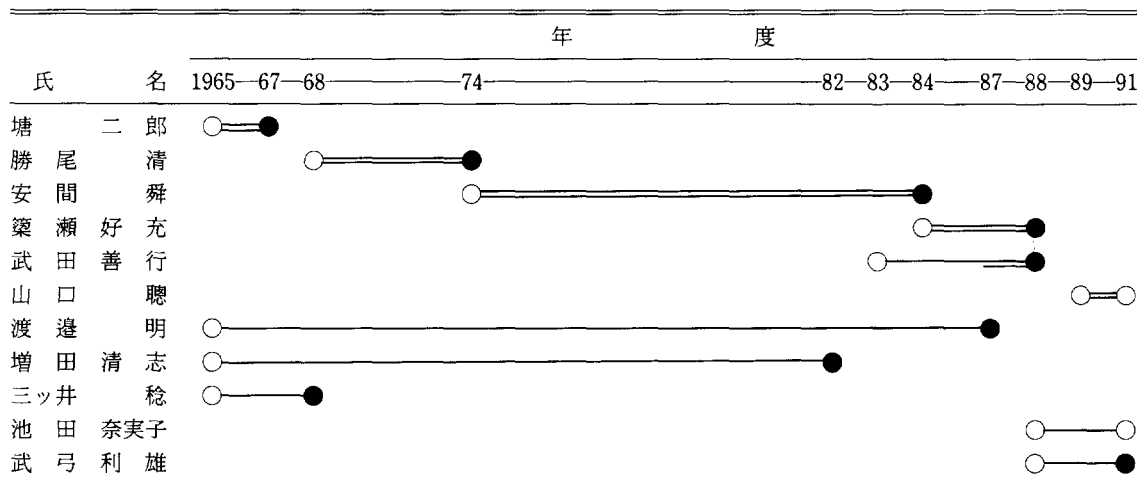
II 育成経過

‘ふうしゅん’の交配から登録に至る26年間に参与した育成関係者は11名であり、その参与した年次の一覧を表-1に示した。

宇治系品種の‘たまみどり’の実生から選抜した‘Z-1’を母親にし、一方、静岡在来種から選抜された系統‘S-6’と‘やぶきた’との交配で作出された‘かなやみどり’を父親にして、1965年に交配を行った。翌年秋に採種、直ちに播種し、172個体を養成した。1971年までの

間に、主として生育特性に基づき一次選抜を実施し(表-2), 10個体を残して他を淘汰した。更に2年間の観察に基づき、1973年に最終的に2個体を選抜した。直ちに苗床において、挿し木による発根性、伸長性、及び活着性、均整度(表-3)などについて検討を加え、F1-NN-71の栄養系番号を与えて、その後の製茶品質の栄養系比較試験に供試した。1983年に総合的に判断した結果、金谷12号の系統番号を与えて、翌1984年より1990年まで特性検定試験、系統適応性検定試験を実施した。以上の選抜試験、特性検定試験、系統適応性検定試験の結果、強健、多収で、かつ新香味を備えた有望系統であることが明らかとなり、実用品種としての命名登録が適当と判定された(表-4~9)。

表-1 ‘ふうしゅん’の育成関係者とその参与した期間



注：担当期間 (○—○, ●は退官あるいは異動したことを示す)。

表-2 ‘ふうしゅん’の1次選抜時の特性(7年生)

品 種	樹姿	樹姿	萌芽 月/日 (赤枯れ)	耐寒性	摘採 月/日	芽数	芽の伸び	芽揃い	色 沢	香 気	水 色	滋 味
(各項目とも5点満点)												
ふうしゅん	開張 ^a	強	4/12	強	5/12	多	中	中	4.5	4.0	5.0	5.0
やぶきた	やや直立	強	4/6	弱	5/7	中	中	良	—	—	—	—
かなやみどり	開張	強	4/10	強	5/10	多	中	中	—	—	—	—

^a 築瀬らによる育成初期の記録(個体選抜時)によれば開張性となっているが、その後も観察を続けたところやや直立性であった。

表-3 ‘ふうしゅん’の苗床検定特性 (1973)

品 種	生存率	樹高	葉数	分枝数	生育	苗の均整度
ふうしゅん	100%	中	中	少	中	中
やぶきた	100	大	多	少	良	良
かなやみどり	97	大	中	少	良	良

注：挿し木 1区 2反復 各25本。

表-4 ‘ふうしゅん’の2次選抜特性 (1982)

品 種	樹高	株張り	摘採面幅	葉層の厚さ	萌芽	寒害 ^a	炭そ病 ^b
ふうしゅん	74cm	120cm	126cm	厚い	4月8日	3	3
やぶきた	62	101	107	中	4月2日	4	6
かなやみどり	67	126	130	やや厚い	4月7日	3	3

^a 被害なし(1)～激甚(5)。^b 被害なし(1)～激甚(10)。

表-5 ‘ふうしゅん’の摘採特性 (1982)

茶期	品種	摘採 月日	摘採芽				出開度	芽揃い	百芽重	新葉					
			芽長	葉数	茎の太さ	芽数				形	大きさ	厚さ	色	光沢	葉質
一番茶			cm	枚	mm	本	%	g							
	ふうしゅん	5/8	4.9	3.2	1.4	182	97	中	76.5	楕円形	やや大	やや厚	濃緑	中	中
	やぶきた	5/2	4.9	3.7	1.4	111	95	中	72.9	狭楕円形	中	中	緑	中	中
	かなやみどり	5/6	5.3	3.5	1.4	152	75	中	71.2	楕円形	中	やや厚	濃緑	中	中
二番茶															
	ふうしゅん	6/26	6.3	3.9	1.4	172	95	中	61.1	楕円形	やや大	やや厚	濃緑	中	中
	やぶきた	6/24	6.2	3.6	1.5	167	90	やや不良	53.3	楕円形	やや大	中	緑	中	中
	かなやみどり	6/26	5.5	3.7	1.5	178	85	中	63.7	楕円形	中	中	緑	中	中
三番茶															
	ふうしゅん	7/29	5.0	3.9	1.4	169	60	やや不良	57.4	楕円形	中	やや厚	緑	中	中
	やぶきた	7/29	5.8	4.1	1.2	136	67	やや不良	38.3	楕円形	やや大	やや厚	緑	中	中
	かなやみどり	7/30	4.8	3.4	1.2	155	60	やや不良	60.2	広楕円形	中	やや厚	緑	中	中

表-6 ‘ふうしゅん’の収量 (1988)

品 種	一番茶		二番茶		三番茶		年間収量(やぶきた指数)	
	圃 場 当たり kg/10a	摘採面 当たり g/m ²	圃 場 当たり kg/10a	摘採面 当たり g/m ²	圃 場 当たり kg/10a	摘採面 当たり g/m ²	圃 場 当たり kg/10a	摘採面 当たり g/m ²
ふうしゅん	648	1,237	637	1,297	409	600	1,694(135)	3,134(134)
やぶきた	425	850	551	932	277	544	1,253(100)	2,326(100)
かなやみどり	528	1,470	589	1,366	268	669	1,385(110)	3,505(150)

表-7 'ふうしゅん'の品質(1988)

茶期 品種	外観		外観 比率	内 質			内質 比率	合計 評点	合計 比率
	形状	色沢		香気	水色	滋味			
一番茶			%				%		%
ふうしゅん	16.2	17.7	100	18.0	18.2	18.2	103	88.3	101
やぶきた	16.2	17.7	100	17.5	18.0	17.2	100	86.6	100
かなやみどり	17.5	17.7	103	18.2	18.5	18.5	104	90.4	104
二番茶									
ふうしゅん	14.0	14.5	102	14.0	16.2	16.0	97	74.7	99
やぶきた	13.2	14.7	100	15.5	16.0	16.0	100	75.4	100
かなやみどり	14.7	15.2	111	15.2	16.0	15.7	98	76.6	101
三番茶									
ふうしゅん	16.5	16.2	107	16.5	16.0	15.5	100	80.7	103
やぶきた	14.7	15.7	100	16.2	15.7	16.0	100	78.3	100
かなやみどり	16.0	16.7	107	16.7	17.0	15.7	103	82.1	104

注：各項目20点満点，合計100点満点で評価。

表-8 'ふうしゅん'の成分特性(1991)

品 種	全窒素%	カフェイン%	タンニン%
ふうしゅん	6.36	3.71	18.6
やぶきた	5.65	3.18	15.7

注：茶利用加工部製茶研究室によって分析された(一番茶，一心三葉摘み)。

表-9 系統適応性検定試験において示された'ふうしゅん'の有望度('やぶきた'に対比して判定)

品 種	系適場所	試験年次				
		1987	1988	1989	1990	平均
ふうしゅん	茨城山間	○	○	△	○	○
	京都茶研	△	○	△	△	△
	三重茶セ	—	○	○	○	○
	高知茶セ	○	○	○	△	○
	熊本茶研	○	○	○	—	○
	平均	○	○	○	○~△	○

注：○ 対照品種に優る △ 対照品種と同等
系適場所の略記：茨城山間(茨城県山間地帯特産指導所)，京都茶研(京都府茶業研究所)，三重茶セ(三重県農業技術センター茶業センター)，高知茶セ(高知県農業技術センター茶業試験場)，熊本茶研(熊本県農業研究センター茶業研究所)。

III 特性の概要

1 形態特性

樹姿は，'やぶきた'よりも幼木期にはやや直立性が強いが，生育するにつれて幾分開張し，樹勢はより強く，葉層は厚く茂る。

新葉は，'やぶきた'に似るがいくらか長楕円形をしており，厚手である。また，'やぶきた'より光沢に富み，淡緑色である。着生する毛茸の量は，'やぶきた'と同程度であり，その長さ，太さともに'やぶきた'に類似する。

成葉は，'やぶきた'に類似するが，いくらか幅広であり(図-1)，濃緑色で光沢に富む。葉質は'やぶきた'より厚手で，葉面のしわは少なく，いくらか平滑である。葉縁はあまり波打たず，内折の程度も緩やかである。成葉の反転度は，'やぶきた'に比べて穏やかであり，茎に対して斜上する傾向が'やぶきた'よりも顕著であるが，葉柄部分の着生角度は'やぶきた'と同じ程度である(表-10)。

2 生育特性

系統適応性検定試験の成績によれば，'ふうしゅん'の生育は極めておう盛であり，挿し木1年半の苗を定植して5年目には，樹高が'やぶきた'より15%高く，株張りは20%広く育ち，株張りの増加率は定植後1.5年の間に191%にも達したことから，摘採面の形成が速やかである(表-11)。従って，定植後早くから摘採が可能となり，

表-10 ‘ふうしゅん’の形態特性一覧（種苗登録申請資料より）

形 質 区 分		ふうしゅん	やぶきた	かなやみどり
樹体	樹姿	中間	やや直立	やや開張
	樹勢	極強	やや強	強
	株張り	大	やや小	大
	幹径	太	中	中
	葉層の厚さ	厚	中	厚
	枝条の分枝数	中	中	やや多
	枝条の節間長	中	中	やや短
	枝条の太さ	太	中	中
	着葉角度	中	中	中
新葉	新葉の形	楕円形	楕円形	楕円形
	新葉の大きさ	中	中	中
	新葉の厚さ	厚	中	中
	新葉の色	淡緑	緑	緑
	新葉の光沢	やや多	中	中
	新葉の葉質	中	やや軟	中
	新葉の芽の毛茸の多少	中	中	中
	新葉の芽の毛茸の大きさ(1)長さ	中	中	中
	新葉の芽の毛茸の大きさ(2)長さ	中	やや細	中
成葉	成葉の形(1)形	楕円形	楕円形	楕円形
	成葉の形(2)先端長	中	なし	なし
	成葉の大きさ	中	やや大	中
	成葉の厚さ	厚	中	中
	成葉の色	濃緑	緑	濃緑
	成葉の光沢	中	やや強	強
	成葉の葉面のしわ	少	中	中
	成葉の葉縁の波	少	やや多	やや多
	成葉の内折度	少	中	中
	成葉の反転度	少	中	やや多



図-1 成葉の比較

左よりZ-1，ふうしゅん，かなやみどり，やぶきた。

表-11 系統適応性検定試験において示された‘ふうしゅん’の生育特性評価

品 種	系適場所	生育の良否(5段階評価) ^a					樹高(やぶきた比)				株張り(やぶきた比)				
		1985	1986	1987	1988	平均	1985	1986	1988	平均	1985	1986	1987	1988	平均
ふうしゅん	茨城山間	5	5	4	5	4.8	106	122	109	112	102	111	105	114	108
	京都茶研	4	4	4	5	4.3	96	112	178	129	100	116	126	163	126
	三重茶セ	4	5	4	4	4.3	118	118	118	118	145	121	120	132	130
	高知茶セ	5	5	5	5	5	108	102	107	106	114	122	127	115	120
	熊本茶研	5	5	5	5	5	121	107	107	111	117	107	116	124	116
	平 均	4.6	4.8	4.4	4.8	4.7	110	112	124	115	116	115	119	130	120
かなやみどり	茨城山間	5	3	4	4	4	87	77	98	87	139	108	114	111	118
	京都茶研	3	2	3	3	2.8	90	83	125	99	114	118	122	124	120
	三重茶セ	3	3	4	4	3.5	90	86	97	91	148	127	123	126	131
	高知茶セ	4	4	5	5	4.5	93	96	100	96	129	126	130	124	127
	熊本茶研	3	5	4	5	4.3	80	88	102	93	105	124	125	130	121
	平 均	3.6	3.4	4.0	4.2	3.8	88	88	104	93	127	121	123	123	124
やぶきた (実測値) ^b	茨城山間	5	3	3	2	3.3	81	71	48	67	37	66	76	88	67
	京都茶研	4	2	2	2	2.5	93	60	36	63	53	50	67	54	59
	三重茶セ	3	3	3	3	3	72	79	36	63	44	67	82	95	72
	高知茶セ	4	3	3	3	3.3	120	44	55	73	58	54	64	79	64
	熊本茶研	4	3	3	3	3.3	86	46	54	62	59	59	75	79	68
	平 均	4.0	2.8	2.8	2.6	3.1	91	60	48	66	52	59	73	79	66

^a 成育不良(1)～極めて良好(5)。

^b 生育の良否は指数(1不良～5良), 樹高はcm, 株張りはcmで示す。

注: 系適場所の略記は表-9の注を参照。

経営的には新・改植に伴う一時的な収入減の負担を軽減する優れた特性と考えられる。

挿し木による増殖苗は生育が良くそろい、伸長もおう盛で生存率が高い(表-3)。

生育は全体的に強健である。耐寒性は‘やぶきた’より強い。重要病害であるチャ炭そ病に対しては中庸な抵抗性があり、発病指数は1.2で、これは‘かなやみどり’の1.1と同等で、‘やぶきた’の1.7よりも強い抵抗性を示す。晩霜の害も系統適応性検定試験中にはほとんど観察されていない。このような特性を活かすには、寒冷な気象条件下でも強健でおう盛に生育でき、かつ地域特産品種として流通しうる特徴を持つ茶品種を求めている、中山間地の茶栽培地域に適すると考えられる。

3 萌芽特性

育成地における萌芽は、4月上旬ないし中旬に観察された。これは‘やぶきた’より6日程遅い。系統適応性検定試験期間の成績によると、萌芽期は暖地の高知では‘やぶきた’よりも平均して5日遅い4月3日ごろである。寒冷地に当たる茨城では萌芽期は‘やぶきた’とほぼ同じ4月

21日である(表-12)。また、育成地において冬季の11月に実施した切り枝を用いた25度加温萌芽試験の結果においては、‘ふうしゅん’は‘やぶきた’よりも萌芽開始までの所要日数が2日多いことが明らかになっており(山口と武弓、未発表成績)。

4 摘採特性

育成地における摘採時期は5月10日前後であり、‘やぶきた’より6日遅い。系統適応性検定試験期間を通じての摘採期は平均して‘やぶきた’より1.5日遅く、‘かなやみどり’より0.8日早く、本品種はチャとしては中晩生品種に位置づけられる(表-13)。

一番茶の芽そろいは良好で‘やぶきた’よりも良くそろい、出開度が50%の頃が最も摘採に適しており、‘やぶきた’よりもいくらか若摘みが適する。摘採した新芽の百芽重は‘かなやみどり’、‘やぶきた’より重い77gである。摘芽の長さは、‘やぶきた’より長めで4.9cmである。30×30cmの枠摘み調査による摘採芽数は182本であり、これは‘かなやみどり’より少なく、‘やぶきた’より多

表-12 系統適応性検定試験中に示された‘ふうしゅん’の萌芽・摘採日

品 種	系適場所	萌芽日(やぶきたに対して+, -で表示)					摘採日(やぶきたに対して+, -で表示)				
		1985	1986	1987	1988	平均	1987	1988	1989	1990	平均
ふうしゅん	茨城山間	+3	-2	+2	-2	+0.3	+1	0	0	0	+0.3
	京都茶研	0	+2	+5	+6	+3	0	+3	+6	0	+2.3
	三重茶セ	—	+5	+3	+4	+4	—	+4	+2	+3	+2.0
	高知茶セ	+3	+4	+7	+7	+5.3	0	0	+3	+4	+1.8
	熊本茶研	+3	+5	+1	—	+3	0	+3	+1	—	+1.3
	平 均	+2.3	+2.8	+3.6	+3.8	+3.1	+0.3	+2	+2.4	+1.8	+1.5
かなやみどり	茨城山間	+4	-1	+3	-2	+1	+1	-1	0	-1	-0.3
	京都茶研	+1	+3	+4	+6	+3.5	-1	+5	+6	+2	+3
	三重茶セ	—	+3	+1	+6	+3.3	—	+1	+2	+8	+3.7
	高知茶セ	+1	+3	+5	+3	+3.0	+2	+1	+1	+4	+2
	熊本茶研	+2	+3	+2	—	+2.3	+3	+4	+3	—	+3.3
	平 均	+2	+2.2	+3	+3.3	+2.6	+1.3	+2	+2.4	+3.3	+2.3
やぶきた (実測値)	茨城山間	4/21	4/25	4/19	4/19	4/21	5/21	5/24	5/24	5/17	5/22
	京都茶研	4/05	4/15	4/09	4/01	4/08	5/14	5/09	5/06	5/07	5/09
	三重茶セ	4/13	4/08	4/03	3/28	4/05	—	5/05	5/02	4/29	5/02
	高知茶セ	—	4/04	3/26	3/27	3/29	4/30	5/06	4/29	4/28	5/01
	熊本茶研	4/05	4/07	3/26	—	4/02	5/05	5/06	4/25	—	5/02
	平 均	4/11	4/12	4/04	4/05	4/07	5/10	5/10	5/05	5/05	5/07

注：系適場所の略記については表-9の注を参照。

表-13 系統適応性検定試験中の‘ふうしゅん’の収量

品 種	系適場所	一番茶収量(やぶきた比)				二番茶収量(やぶきた比)				全収量(やぶきた比)				
		1988	1989	1990	平均	1988	1989	1990	平均	1987	1988	1990	平均	実数kg
ふうしゅん	茨城山間	197	225	167	196	226	308	239	258	140	209	197	182	329
	京都茶研	328	414	200	314	766	143	—	455	205	566	—	386	679
	三重茶セ	150	172	163	162	120	266	178	188	—	131	171	151	640
	高知茶セ	128	102	155	128	161	—	128	239	164	142	140	149	739
	熊本茶研	147	109	—	128	195	—	—	195	160	168	—	164	585
	平 均	190	204	171	186	294	239	182	267	167	243	169	206	674
かなやみどり	茨城山間	112	164	143	140	161	192	156	170	98	132	148	126	
	京都茶研	312	248	152	237	158	152	—	155	147	228	—	188	
	三重茶セ	90	115	130	237	79	199	117	132	—	83	123	103	
	高知茶セ	135	105	147	129	133	—	104	119	125	134	122	127	
	熊本茶研	123	108	—	116	114	—	—	114	136	119	—	128	
	平 均	154	148	143	147	129	181	126	138	127	139	131	134	438
やぶきた (実測値kg)	茨城山間	89	76	138	101	62	65	97	75	157	151	235	181	
	京都茶研	59	107	100	89	70	78	—	74	221	130	—	176	
	三重茶セ	115	161	246	174	194	137	292	208	—	309	538	427	
	高知茶セ	317	343	245	302	226	—	341	283	359	543	586	496	
	熊本茶研	228	240	—	234	168	—	—	168	318	396	—	357	
	平 均	162	185	182	180	144	93	243	162	264	306	453	327	

注：系適場所の略記については表-9の注を参照。表中の一線は欠測を示す。

い。収穫した新芽の平均着葉数は3.2枚で、'やぶきた'、'かなやみどり'よりわずかに少ない(図-2, 3)。

'ふうしゅん'の一番茶の収量は特に多い。例えば、5年生株の収量は'やぶきた'の23%増しで、これは10a当たりの実数で648kgである。二番茶の収量も多く、これは'やぶきた'の8%増し、10a当たりの実数で637kgである。総合的にみて、多収性の特徴が明らかである(表-6, 13, 14)。

5 品質特性

'ふうしゅん'の一番茶の総合的な品質はほぼ'やぶきた'と同等である。しかし、全窒素、タンニンのいずれも'やぶきた'より含量が多く、製茶方法について更に研究すれば、香り、味、共に一段と優れた製品が作り出せるものと思われる(表-8)。荒茶の外観評価において、形状に関してはやや大型の葉が目立ったため、審査評点が'やぶきた'より劣ったが、色沢が鮮やかな緑色をしてお

り、若芽摘みとすれば、外観品質は向上するため、製造面では何ら問題にならないものと考えられた。試みに摘採直前3ないし4日間の遮光をしてみたところ、荒茶の外観は極めて良好な鮮緑色となり、'やぶきた'をしのぐものとなった(新品種登録候補審査会成績, 1991, 未発表)。内質(香气、水色、滋味)は総合して'やぶきた'に劣らず、特に香气の豊かさが特徴的である。水色は幾分黄緑色よりも緑味が勝ることがあり、審査評点では'やぶきた'にやや劣るが、'かなやみどり'よりは優れる。滋味は、強くて'やぶきた'と比べて遜色無く、'かなやみどり'より上位の評価を受けた(表-7, 15)。また、茶の主産地である静岡県での試作の結果からも'ふうしゅん'は多収性を示しており、品質、特に香气については'やぶきた'に充分匹敵している(表-16)。中山間地の茶業経営では香气の高い茶の生産を心掛けており、'ふうしゅん'はその品質審査結果によれば、香气については'やぶきた'をしのぐことが明らかになったので、中山間地向きの品種としての条件を備えているものと考えられる。

表-14 系統適応性検定試験中の'ふうしゅん'の一番茶摘採時の特性(1989, 1990年度の平均)

品 種	系適場所	芽摘い	出開度 %	百芽重 g	芽 長 cm	芽摘み芽数 本	摘採芽の葉数 枚
ふうしゅん	茨城山間	3.5	46	57	5.5	126	3.2
	京都茶研	3	84	38	2.8	230	2.9
	三重茶セ	4.5	43	45	5.9	123	3.6
	高知茶セ	4	47	49	5.2	138	3.6
	熊本茶研	4	67	34	4.6	180	3.6
	平 均	3.8	48	45	4.8	137	3.4
かなやみどり	茨城山間	3.5	37	42	5.5	109	3.0
	京都茶研	3	73	29	2.7	218	3.3
	三重茶セ	3.5	37	42	5.7	115	3.2
	高知茶セ	4.5	17	49	5.4	139	3.2
	熊本茶研	3	78	34	3.5	191	3.3
	平 均	3.5	48	39	4.6	154	3.2
やぶきた	茨城山間	4	49	58	5.4	97	2.9
	京都茶研	3	86	29	2.2	202	3.1
	三重茶セ	3.5	46	46	6.1	81	3.4
	高知茶セ	3	26	49	5.5	113	3.3
	熊本茶研	4	74	44	3.9	144	3.2
	平 均	3.5	56	45	4.6	127	3.2

注：系適場所の略記については表-9の注を参照。

表-15 系統適応性検定試験中の‘ふうしゅん’の一番茶の品質検査結果

品 種	系適場所	一番茶の外観(各項目10点満点) 2年間の平均				一番茶の内質(各項目10点満点) 4年間の平均					外観と内質	
		形状	色 沢	計	やぶきた比	香気	水色	滋味	計	やぶきた比	合計	やぶきた比
ふうしゅん	茨城山間	7.5	7.5	15		8.3	6.8	8	23.1		38.1	
	京都茶研	7.8	7.8	15.6		8.2	7.2	7.6	23		38.6	
	三重茶セ	8	8.8	16.8		10	9.5	9.8	29.3		46.1	
	高知茶セ	5.0	4.8	9.8		7.5	7.5	8.3	23.3		33.1	
	熊本茶研	7.0	6.0	13.0		10	8.3	10	28.3		42.3	
	平 均	7.1	7.0	14.0	82	8.8	7.9	8.5	25.4	98.1	39.4	91.8
かなやみどり	茨城山間	9	8	17		7.3	6.5	6.5	20.3		37.3	
	京都茶研	9	7.8	16.8		8.8	8	7.1	24.0		40.8	
	三重茶セ	9	9	18		8.7	8	8.7	25.5		43.5	
	高知茶セ	5.3	5.8	11.0		7.5	7.3	5.9	20.2		31.2	
	熊本茶研	9	7	16		7	8	6.7	21.7		37.7	
	平 均	8.3	7.2	15.8	93	7.9	7.6	7.0	22.4	86	38.2	89.0
やぶきた	茨城山間	8	8	16		8	8.8	8.5	25.3		41.3	
	京都茶研	8.8	8.5	17.3		9.1	9.0	9.0	27.1		44.4	
	三重茶セ	9	9.3	18.3		9	9.2	9.5	27.7		46.0	
	高知茶セ	7.3	7	14.3		7	8.6	6.9	22.5		36.8	
	熊本茶研	9	10	19		9	8.7	9	26.7		45.7	
	平 均	8.4	8.6	17.0	100	8.4	8.9	8.6	25.9	100	42.9	100

注：系適場所の略記については表-9の注を参照。

表-16 静岡県における‘ふうしゅん’の試作結果（1989年度成績）

試作場所	品 種	樹高 cm	株張り cm	摘採面 幅 cm	一 番 茶						
					萌芽日	出開度	形状+色沢	香気	水色	滋味	審査点合計
静岡県茶試	ふうしゅん	103	179	168	5/1	73	20	15	13	13	61
	やぶきた	78	188	133	5/6	95	16	12	13	12	53
同富士分場	ふうしゅん	83	111	104	5/1	56	35	20	20	19	94
	やぶきた	68	98	94	5/1	53	37.5	20	18	18	93.5

試作場所	品 種	二 番 茶						
		萌芽日	出開度	形状+色沢	香気	水色	滋味	審査点合計
静岡県茶試	ふうしゅん	6/29	44	18	13	16	18	65
	やぶきた	7/3	51	13	15	13	13	54
同富士分場	ふうしゅん	6/19	74	25	14	14	13.5	66.5
	やぶきた	6/18	56	26.5	11	12.5	12.5	62.5

IV 適地及び栽培上の注意

耐寒性が十分な品種であり、また病害虫の被害も少ないことから、‘やぶきた’との間に摘採時期の遅れの少ない、東日本の冷涼地、ないしは中部日本の山間地の茶園に適する。京都府においては重粘土質土壌で試作されているが、本品種は‘やぶきた’よりも生育、収量ともに優れていたことから、特に土質に対する許容範囲は広いものと考えられる。

また本品種はやや直立性であり、初期生育もおう盛であるので定植後の仕立ては枝数確保に注意が必要である。つまり、あまり高い位置で切り戻しをすると頂芽優勢が強く発現して、摘採面形成に不可欠な側方への枝条伸長が望めず、株張りが不良となって、本品種の特徴である多収性が活かされない。また、生育がおう盛であるので、秋の剪枝は生育の完全な停止を見極めてから実行するような注意が必要と考えられる。

V 命名の由来

‘ふうしゅん’は、漢字で書けば‘富春’であり、新春の満ち足りた香味にちなむとともに、多収性を活かして茶業経営を豊かに富ませる品種になるようにとの願いを込めている。また、緑茶の故郷ともいえる、中国、浙江省の杭州付近を流れる名河、富春江になぞらえてある。

VI 摘 要

煎茶用品種‘やぶきた’を代替する品種として、‘ふうしゅん’が1991年に茶農林41号として新しく農林登録された。‘ふうしゅん’は多収性を備え、生育おう盛かつ耐寒性の強い品種である。

‘ふうしゅん’は‘Z-1’と‘かなやみどり’との1965年の交配で作出された。

収量性、耐病性、耐虫性、耐寒性、荒茶品質、地域適応性などにつき検定した結果、優れた特性が認められた。

生育がおう盛で、強健であり、独特の香気を備えていることから‘ふうしゅん’は本州における茶生産地の中でも中山間地や幾分寒冷な地域に適すると思われる。

A New Cultivar, ‘Fushun’, for Green Tea

Satoshi YAMAGUCHI, Toshio TAKYU, Namiko IKEDA, Yoshiyuki TAKEDA,
Akira WATANABE, Yoshimitsu YANASE and Shun AMMA

Summary

To replace the green tea cultivar ‘Yabukita’ by different cultivars with distinctive quality, ‘Fushun’ was newly registered under the name of ‘Cha-norin-yonjuichi-gou’ (Norin No. 41 Tea) by MAFF in 1991. It was bred through the crossing of cv. ‘Z-1’ (seed parent) with cv. ‘Kanayamidori’ (pollen parent) in 1965.

After intensive testing of the productivity, disease and pest resistance, cold tolerance, made-tea quality and local adaptability, its superiority was eventually recognized.

Based on the hardy growth and distinctive aroma of this new cultivar, it is anticipated that ‘Fushun’ will be cultivated in many tea-producing areas in the relatively cool and semi-mountainous region of mainland Japan.



図－2 ‘ふうしゅん’の新芽（一番茶期）



図－3 伸長した枝条の比較（一番茶期）
左よりめいりよく，ふうしゅん，やぶきた。